

小児緩和とグリーフケア
臨床心理士 西尾温文

ダギーセンターの原則

1982年に設立され、全米および世界の子どものためのグリーフケアのモデルとなったダギーセンターの4つの原則を紹介する。次の通りだ。

- ①子どもが喪失に対して示す悲しみは大人と同じように自然な反応である。
- ②どの人もおのずと悲しみを癒す力を持っている。
- ③悲しみの期間と深さは人によって異なる。
- ④喪失体験をした人をケアし、その人を認めることが癒しの過程を促す。

この原則にもとづき通常10のプログラムが隔週で行われる。3歳から5歳までが1グループ、6歳から12歳までは、亡くなった人とその死因で4グループに分かれる。他に11歳から35歳までを年齢で5グループに分けている。保護者のグループは10代までの子のグループと平行して行われる。また、11歳からのグループには、亡くした人に友人が加わる。

いずれも参加費は無料で、期間もそれぞれの子どもと家族に任されている。参加期間の平均は1年だが、数回で終わる子もいれば数年参加する子もいる。ダギーセンターは、その子にと

って大切な人を亡くした後の悲嘆過程を尊重し、受け入れ、必要な回数はその子に任せていると理解される。

2013年7月現在、ダギーセンターは、35歳までの400人とその家族275人にプログラムを提供している。

ダギーセンターのプログラム

6歳から12歳のプログラムを紹介しよう。子どもたちは放課後集まってくる。子どもと保護者は別の部屋に集まり、子どもたちのプログラムはオープニングサークルで始まる。オープニングサークルは、クッションとぬいぐるみの置かれた部屋で、子どもたちが丸く輪になり座る。新築のダギーセンターは、もともと部屋が円形なので、座ると自然に輪ができる。ファシリテーターに促され、話す子がトーキングスティックを持ち、順に自分の名前と喪失体験を紹介する。話したくなければ、名前だけ言えばよく、「Pass」と言って次の人にトーキングスティックを渡す。その後、子どもたちは銘々好きな部屋に行つて過ごす。造形、室内・室外アクティビティ、音楽、打楽器、衣装替えのための各部屋があり、他にステージ、病室も用意されている。ダギーセンターを有名にした一つに

Volcano Room (写真)があるが、この部屋は、厚い緩衝材の内装がほどこされていて、中で大きなぬいぐるみと格闘もできるし、サンドバッグがあつ

てパンチもできるようになっていた。



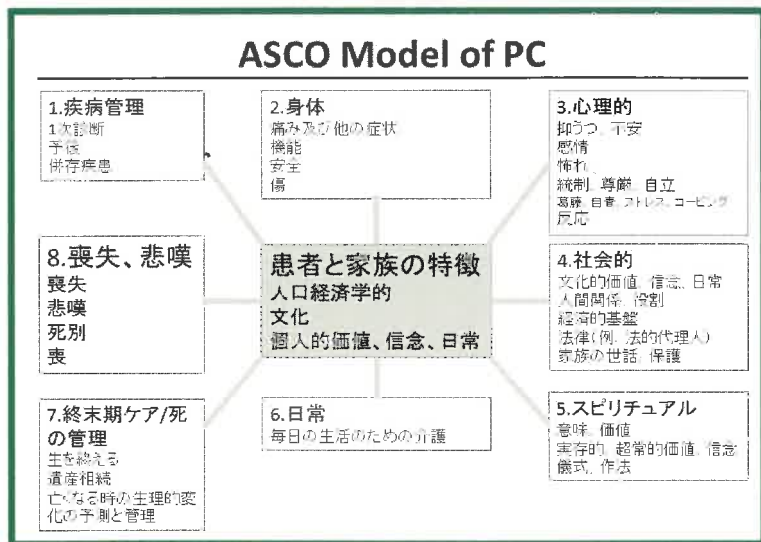
プログラムの時間は年齢によるが、90分が多く、終わりが近づくとも、子どもたちはクロージングサークルに集まる。クロージングサークルでは、今日誰とどんなことをしたかを話しながら、遊んだ時の興奮からクールダウンしていく。また、その日が大切な誰かを亡くした子がいる場合は、ろうそくを灯し部屋を暗くして、その子が大切な人の思い出を話す。しみりとしていい時間だ。自分の悲しみを話すことができ、その気持ちを、尊重してもらえらることを知る機会になる。一人の子の感情が共感され共有されていく。

緩和ケアとグリーフ

ダギーセンターをモデルとしたグリーフケアプログラムが全米500箇所で行われている。なぜそれほど広がりをもち、支持されるのだろうか。次の図を見てもらいたい。

米国臨床腫瘍学会 (American

Society Clinical Oncology: ASCO) では、緩和ケアモデルとして図のASCOモデルを提唱している。図中の8に注目



してもらいたい。米国の緩和ケアモデルは、大切な人を喪つた人の喪失、悲嘆のケアも含めていることが分かる。ダギーセンターは、このモデル以前から、子どもたちの喪失、悲嘆のケアを行っていた。つまり、ダギーセンターは、緩和ケアの先駆なのだ。ダギーセンターに集まってくる子は、家族が亡くなった病院やホスピス、子どもが通う学校から紹介されるという。前号でも述べたが日本は、まだ遺族ケアを始めたばかりだ。国立がんセンター名誉総長の垣添忠生は「すべての病院で遺族にグリーフケアの提供を」と言う。筆者も同感である。